

第39回Children Firstのこども行政のあり方勉強会

# 文部科学省委託事業 **不登校要因調査報告**

## 不登校の要因とエビデンスに基づいた支援の在り方

公益社団法人  
所長/主席研究員

子どもの発達科学研究所  
和久田学



# 目次

## 01. 不登校の現状と課題

## 02. 静的要因×動的（きっかけ要因）

## 03. 不登校に関連する要因

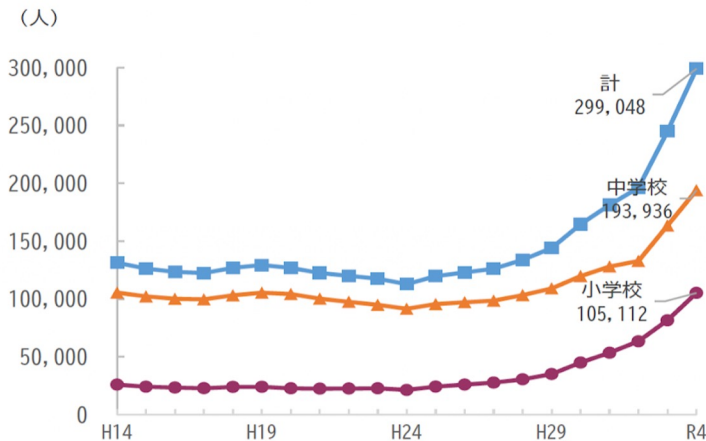
## 04. 考察と提案



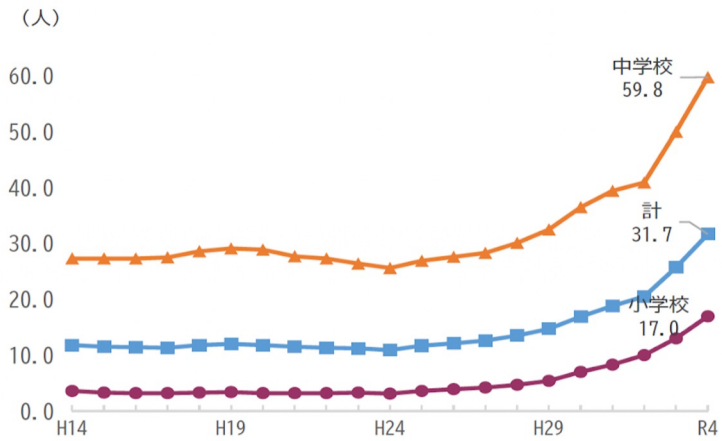
# 小・中学校における不登校の状況について

- 小・中学校における長期欠席者のうち、不登校児童生徒数は299,048人(前年度244,940人)であり、児童生徒1,000人当たりの不登校児童生徒数は31.7人(前年度25.7人)。
- 不登校児童生徒数は10年連続で増加し、過去最多となっている。

不登校児童生徒数の推移



不登校児童生徒数の推移 (1,000人当たり不登校児童生徒数)



不登校児童生徒数(上段)と1,000人当たりの不登校児童生徒数(下段)

	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
小学校	25,869	24,077	23,318	22,709	23,825	23,927	22,652	22,327	22,463	22,622	21,243	24,175	25,864	27,583	30,448	35,032	44,841	53,350	63,350	81,498	105,112
	3.6	3.3	3.2	3.2	3.3	3.4	3.2	3.2	3.2	3.3	3.1	3.6	3.9	4.2	4.7	5.4	7.0	8.3	10.0	13.0	17.0
中学校	105,383	102,149	100,040	99,578	103,069	105,328	104,153	100,105	97,428	94,836	91,446	95,442	97,033	98,408	103,235	108,999	119,687	127,922	132,777	163,442	193,936
	27.3	27.3	27.3	27.5	28.6	29.1	28.9	27.7	27.3	26.4	25.6	26.9	27.6	28.3	30.1	32.5	36.5	39.4	40.9	50.0	59.8
計	131,252	126,226	123,358	122,287	126,894	129,255	126,805	122,432	119,891	117,458	112,689	119,617	122,897	125,991	133,683	144,031	164,528	181,272	196,127	244,940	299,048
	11.8	11.5	11.4	11.3	11.8	12.0	11.8	11.5	11.3	11.2	10.9	11.7	12.1	12.6	13.5	14.7	16.9	18.8	20.5	25.7	31.7



# 現在の不登校支援策の主流

## 誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校・いじめ対策等の推進

令和6年度予算額 88億円  
(前年度予算額 85億円)



令和5年度補正予算額 51億円

### 背景・課題

○ 不登校児童生徒数が小・中学校で約30万人、そのうち学校内外の専門機関等で相談・指導を受けていない小・中学生が約11万4千人と、いずれも過去最多となり、また、いじめ重大事態の発生件数も923件と過去最多となる中、「誰一人取り残されない学びの保障」に向けた取組の緊急強化が必要である。

### 目標

○ 「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（COCOLOプラン）」（令和5年3月）や「不登校・いじめ緊急対策パッケージ」（令和5年10月）等に基づき、こども家庭庁等の関係機関とも連携を図りながら、誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校・いじめ対策等を推進する。

不登校支援：学びの場の確保、SC・SSWの配置充実、学びの継続事業  
→→ 約86億円（R5補正、37億）

不登校の調査研究  
→→ 約5千万円（R5補正、15億）

### 文科科学省 <令和6年度予算額の概要> 主に教育委員会を通じた対応

専門家を活用した教育相談体制の整備・関係機関との連携強化等  
8,680百万円（8,461百万円）[令和5年度補正予算額 3,728百万円]

#### ① 不登校児童生徒の学びの場の確保の推進

- ・ **学びの多様化** 学校の設置準備に加え、新たに設置後の運営支援（設置準備：20校、設置後：7校）
- ・ 教育支援センターにおける多様な相談・支援体制の強化等



#### ② スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの配置充実

- ・ SCの配置（全公立小中学校 27,500校、週4時間）
- ・ SSWの配置（全中学校区 10,000校、週3時間）
- ・ **重点配置校数の拡充**（SC：7,200→10,000校、週8時間）  
（SSW：9,000→10,000校、週6時間）
- ・ オンラインを活用した広域的な支援体制整備（全都道府県・政令指定都市）



#### ③ SNS等を活用した教育相談体制の整備推進

- ④ **不登校児童生徒等の学び継続事業** [令和5年度補正予算額 3,728百万円]
- ・ 校内教育支援センター（SSR）の設置促進（6,000校）
- ・ 在籍校とつながり、自宅にいる児童生徒・保護者へ学習・相談支援を行うための**教育支援センターのICT環境の整備**（600ヶ所）
- ・ より課題を抱える学校における組織的な支援のための**SC・SSWの配置充実**（3,900校）

いじめ対策・不登校支援等に関する調査研究【委託】  
47百万円（50百万円）[令和5年度補正予算額 1,404百万円]

#### ① いじめ・不登校等の未然防止に向けた魅力ある学校づくりに関する調査研究

- ・ **自殺予防教育の指導モデル開発**
- ・ 心理・福祉に関する**教職員向けの研修プログラム**の開発
- ・ 経済的に困窮した家庭の不登校児童生徒に対する**経済的支援の在り方**に関する調査研究 等

#### ② スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーの常勤化に向けた調査研究

#### ③ 不登校児童生徒等の早期発見・早期支援事業

【令和5年度補正予算額 1,404百万円】

- ・ **1人1台端末等を活用した「心の健康観察」**の全国の学校での導入推進
- ・ 保護者への相談支援やアウトリーチ等の**地域の総合的拠点機能形成**
- ・ 不登校・いじめ対策等の効果的な活用の推進

#### 【関連施策】

- ▶ 公立学校施設の整備（廃校や余裕教室等の既存施設を改修して活用する場合の支援メニューの創設（令和9年度まで）等）、私立学校施設・設備の整備の推進
- ▶ 不登校児童生徒個々の実情に対応するために必要な支援に係る教職員配置（義務教育費国庫負担金）（学びの多様化学校に対する教職員の優先配置等）
- ▶ 学習指導員等の配置
- ▶ スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの配置（私立）私立高等学校等経常費助成費補助金（特別補助）
- ▶ 養護教諭等の業務支援体制の充実（学校保健推進体制支援事業）
- ▶ 夜間中学の設置促進・充実
- ▶ 高等学校における教育の質確保・多様性への対応に関する調査研究
- ▶ 各学校・課程・学科の垣根を超える高等学校改革推進事業

- いじめ防止対策に関する関係府省連絡会議
- いじめ重大事態の情報共有
- 誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策推進本部

### こども家庭庁 主に首長部局を通じた対応

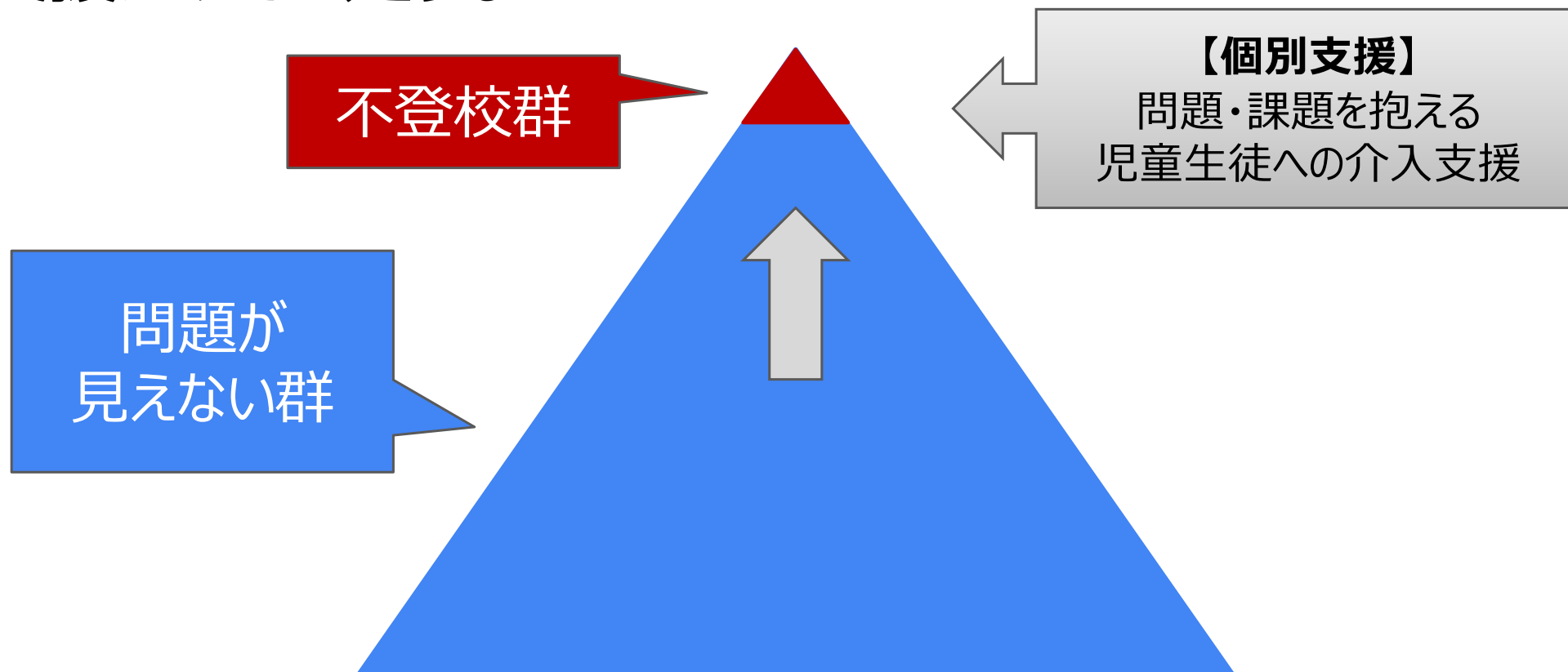
- ・ 学校外からのいじめ解消アプローチ
- ・ いじめ調査アドバイザー
- ・ こどもの多様な居場所づくり 等



(担当：初等中等教育局児童生徒課) 33

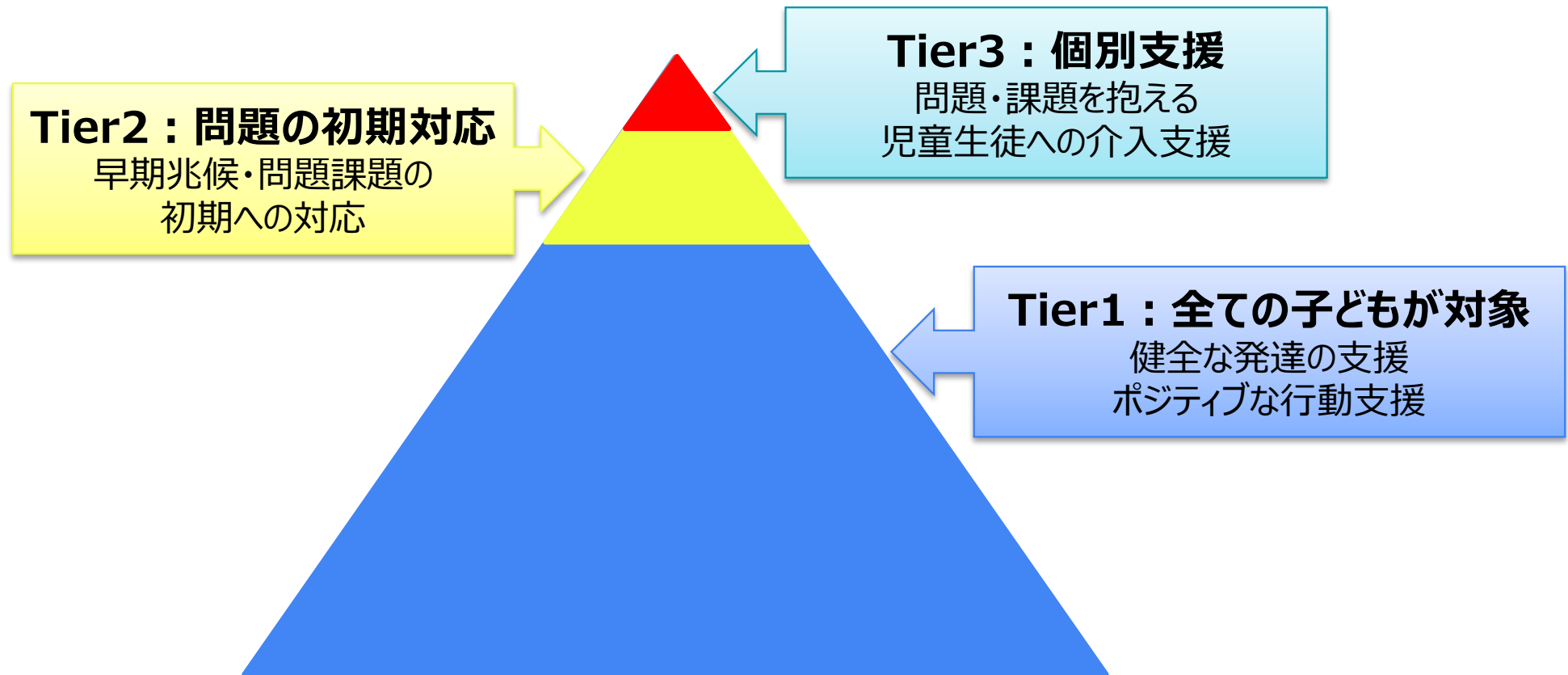


# 不登校もしくは登校不安定な児童生徒を対象にした 支援だけでは足りない

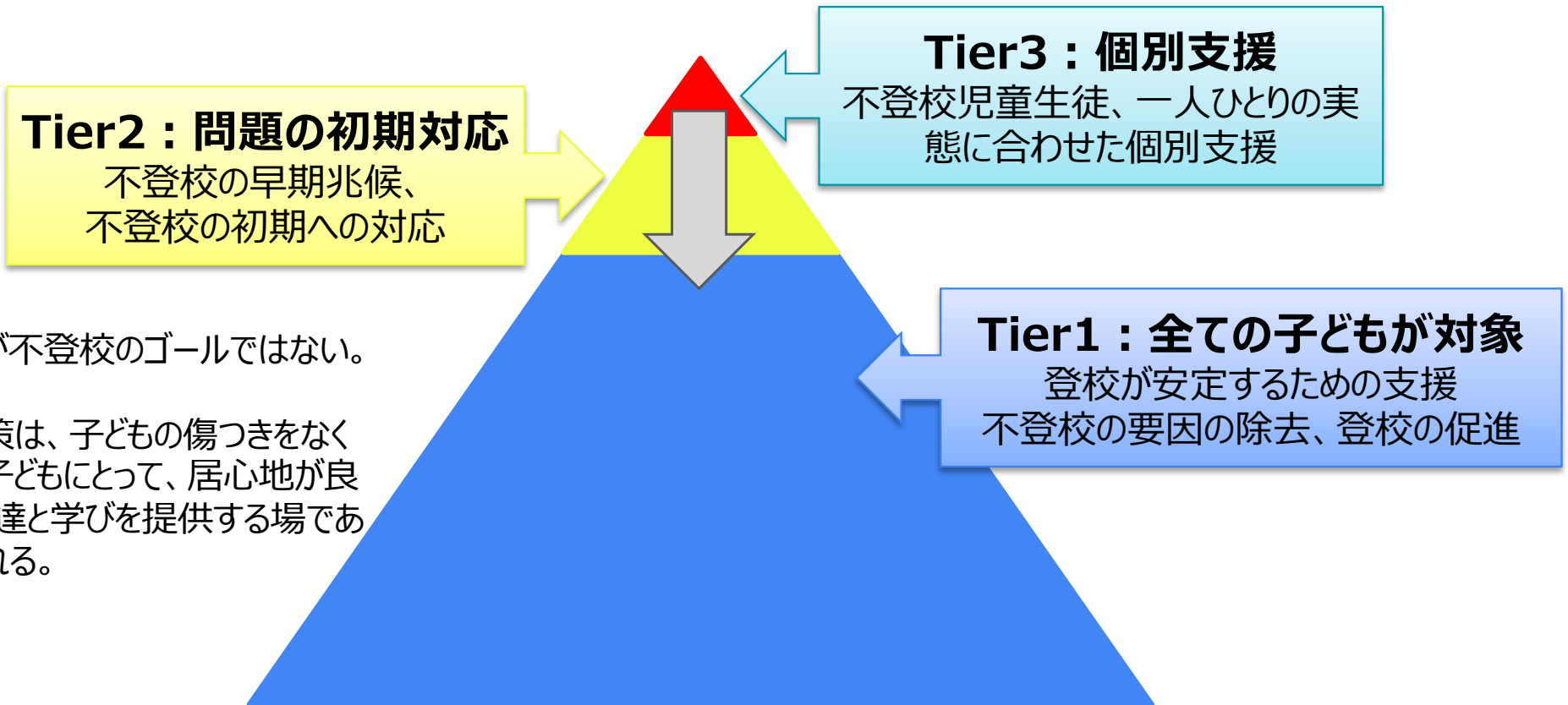


# RTIモデル : **R**ESPONSE **T**O **I**NTERVENTION **M**ODEL

(介入支援への反応モデル)



# 不登校対策のRTIモデル



学校復帰が不登校のゴールではない。

不登校対策は、子どもの傷つきをなくし、すべての子どもにとって、居心地が良く、健全な発達と学びを提供する場であることが望まれる。



# Tier 1 の難しさ

- 問題が起きないようにする予防が重要だが、「問題が起きていない状態を保持する」という目標が見えにくい。
- しかも、何をすれば問題が起きないのか、がわからない。
- 様々な取り組みをしたとしても、その効果があったのかもわからないので、取り組みの継続が難しい。





## Tier 2、3の難しさ

- 何が早期兆候なのか、わからない。  
(欠席が始まる、という段階では、既に問題が起きていると考えることもできる)
- 早期兆候に個人差があるかもしれない。
- 早期兆候を見つけられたとしても、どうすればいいのかが分からなければ始まらない。
- 個別の支援も、個人差、環境差があり、どうやってアセスメントを行い、どのような支援を、どのような方法提供すればいいのかわからないという難しさがある。



# 目次

01. 不登校の現状と課題

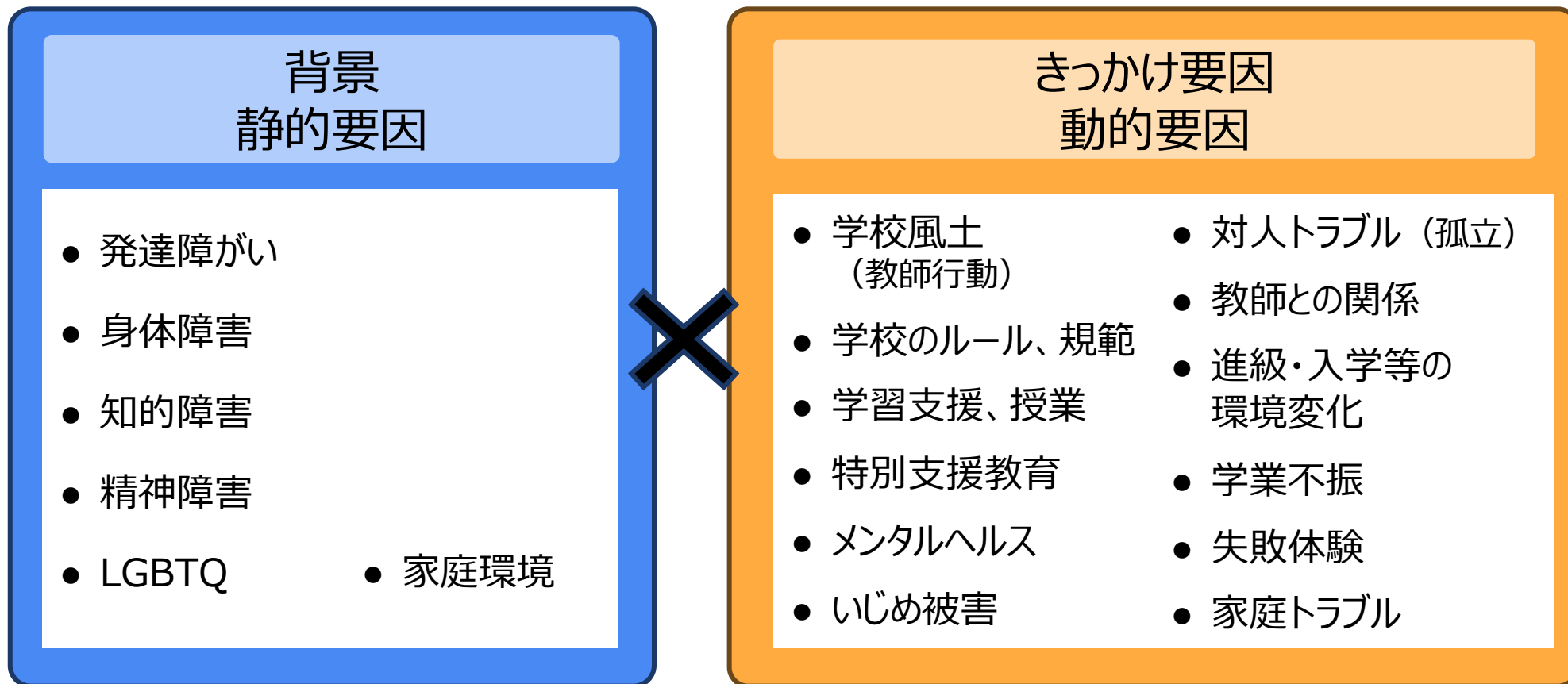
02. 静的要因×動的（きっかけ要因）

03. 不登校に関連する要因

04. 考察と提案

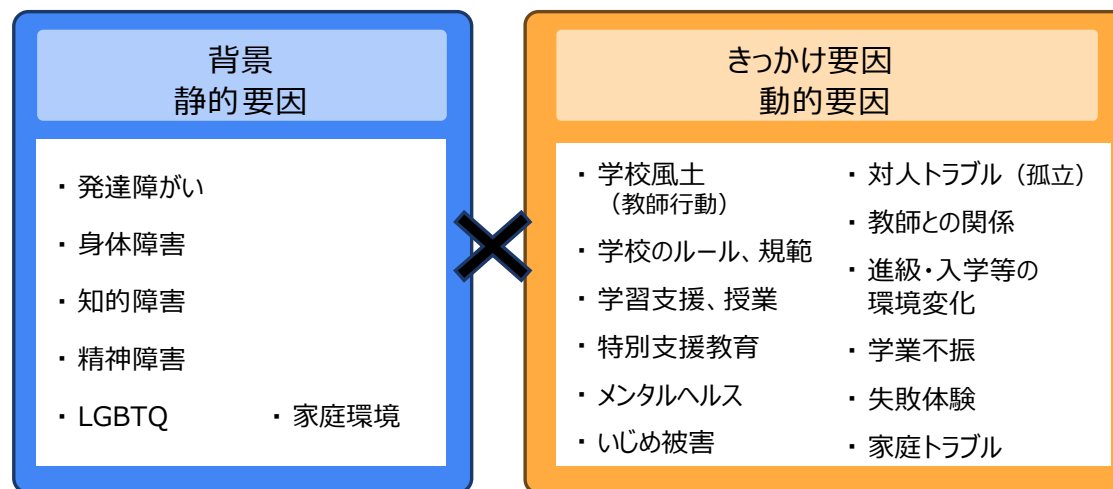


# 考え方：不登校の要因（先行研究から考えるモデル）



# 要因から支援に

- 静的要因は、基本的には変えられないし、そこを問題視すると人権侵害にあたる可能性が高い。
- ただし、静的要因の中には、合理的配慮の提供、特別支援教育などのシステムや長期に渡る支援を行なうことで軽減が可能なものもある。
- 教育側は動的要因に対してアプローチする必要がある。



# 目次

- 01. 不登校の現状と課題
- 02. 静的要因×動的（きっかけ要因）
- 03. 不登校に関連する要因
- 04. 考察と提案



# R5年度文部科学省委託事業 不登校要因調査

## 今回の調査の特長

- 文部科学省の委託事業であることから、4つの教育委員会の全面協力を得た。
- 不登校の児童生徒だけでなく、そうでない児童生徒（一般群）について、本人、保護者、教師の三者から回答を得た。
- 事実ベースでの調査とした。（教師の考えを聞くのではなく、把握している事実）
- 単なる記述統計ではなく、解析を行った。（統計的な関連、有意差を明らかにした）

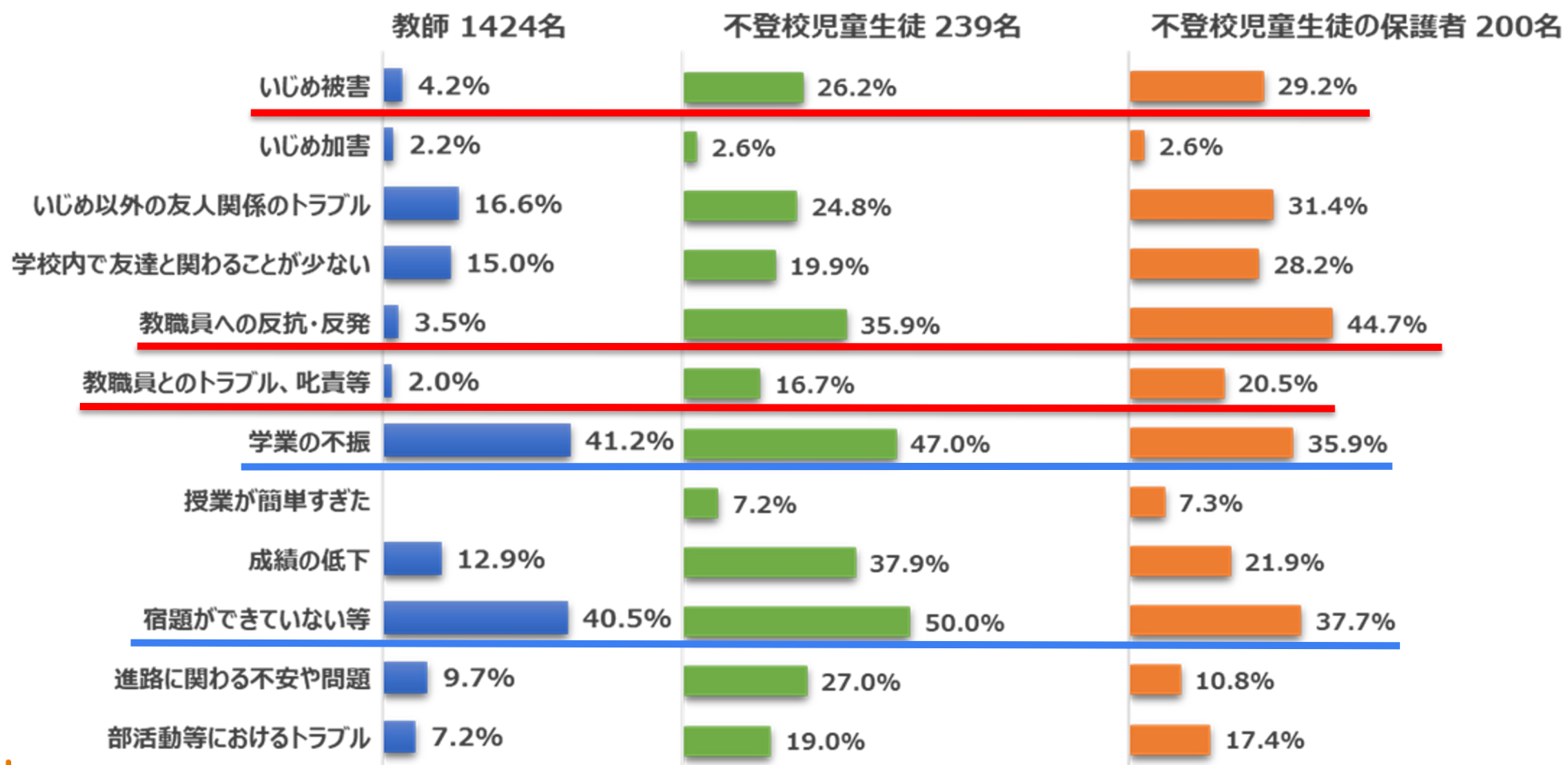


# 自治体ごとの実施数

実施数		教師調査		児童生徒調査		保護者調査	
		調査A	調査B	調査A	調査B	調査A	調査B
吹田市 (大阪府)	指定校	1,365	64	1,373	48	(未実施)	11
	その他	(未実施)	522	(未実施)	48	(未実施)	62
府中市(広島県)		8 (未実施)	69	380	11	357	7
延岡市(宮崎県)		5,913	140	5,238	156	2,923	45
山梨県	小中学校	11,785	559	7,796	356	6,498	203
	高校	4,448	70	3,523	76	2,013	21
合計		23,519	1,424	18,310	695	11,791	349

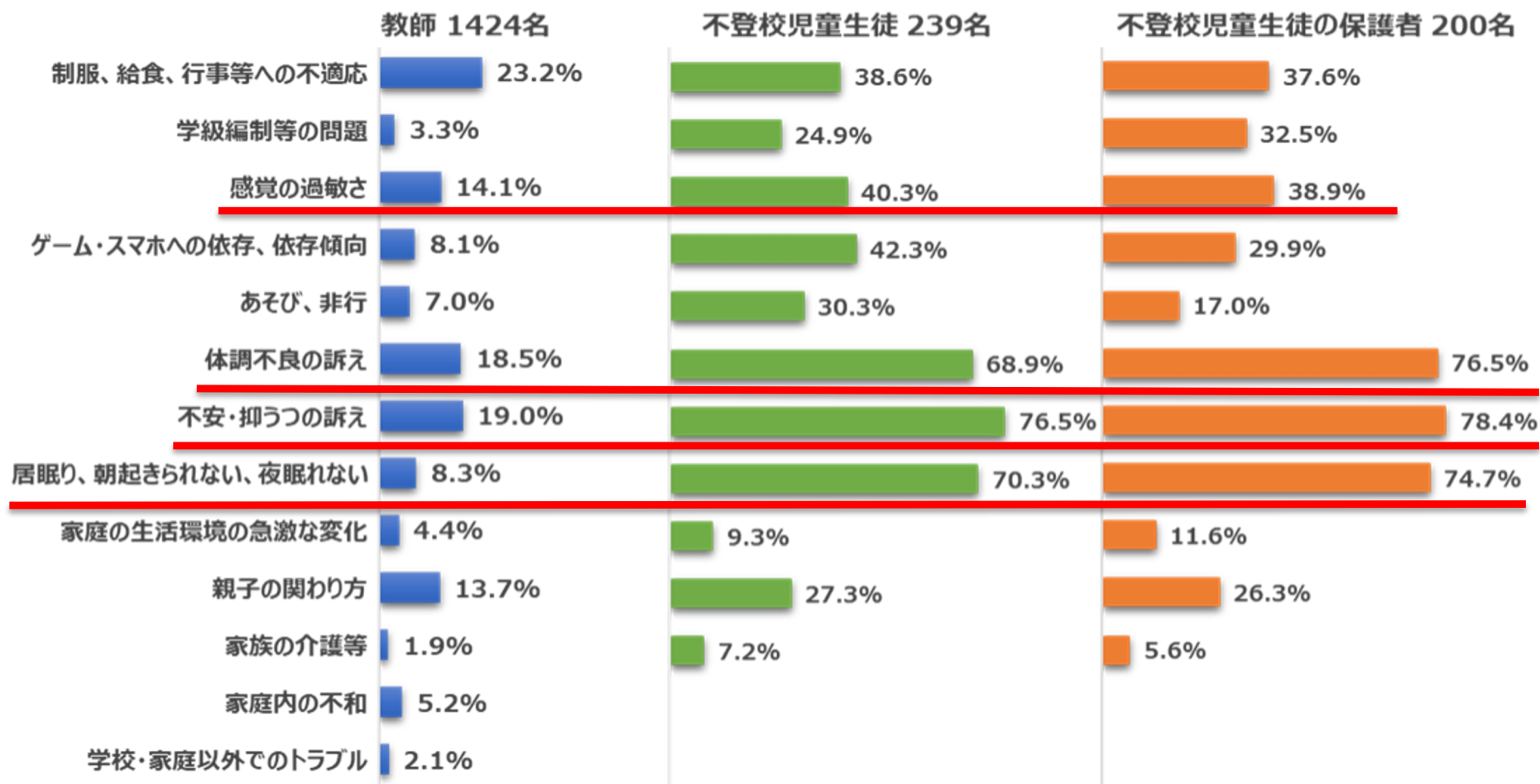
調査A：R4不登校でない児童生徒、 調査B：R4不登校の児童生徒

# 教師・児童生徒・保護者回答の比較

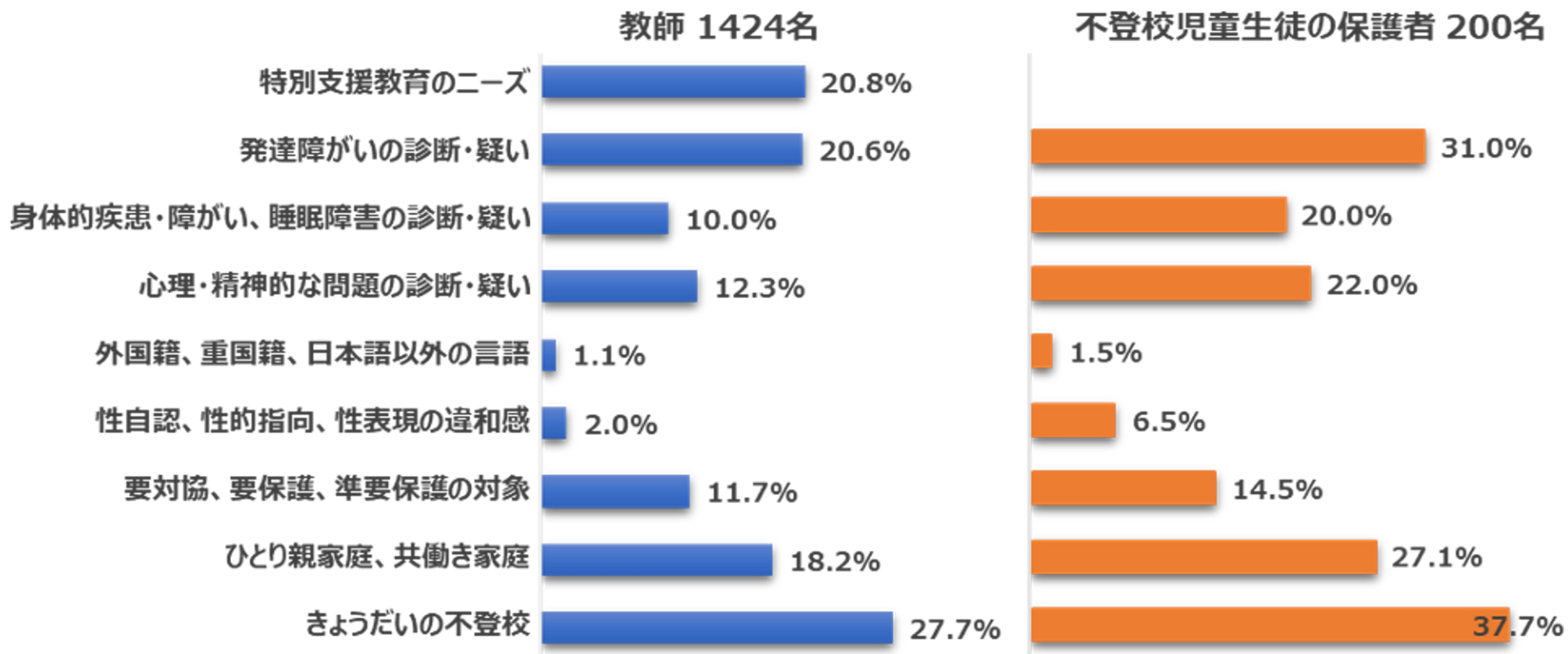




# 教師・児童生徒・保護者回答の比較（続き）



# 背景要因



# 教師が把握できる情報、難しい情報

- **難しい** : いじめ被害、教職員への反抗・反発、**不安・抑うつ、体調不良、生活リズム不調、感覚過敏**
- **把握可能** : 学業不振、宿題が出せない

教師による把握の困難さ、限界を認識する。

把握することが難しいことは、新たな方法を用いる。

→ 本人へのアンケート、ツールの利用など



# 教師回答による不登校児童生徒と不登校でない児童生徒の違い（きっかけ要因）

質問項目	不登校でない児童生徒	R4不登校の児童生徒	違い (オッズ比)	オッズと95%信頼区間
いじめ被害	3.9%	4.2%	1.09	◆
いじめ加害	3.8%	2.2%	0.56	◆
いじめ以外の友人関係のトラブル	15.9%	16.6%	1.05	◆
学校内で友達と関わるのが少ない	2.9%	15.0%	5.97	◆
教職員への反抗・反発	2.6%	3.5%	1.35	◆
教職員とのトラブル、叱責等	1.7%	2.0%	1.21	◆
学業の不振	11.7%	41.2%	5.26	◆
成績の低下	1.5%	12.9%	9.93	◆
宿題ができていない等	11.1%	40.5%	5.44	◆
進路に関わる不安や問題	1.7%	9.7%	6.20	◆
部活動等におけるトラブル	2.6%	7.2%	2.88	◆

# 教師回答による不登校児童生徒と不登校でない児童生徒の違い（きっかけ要因）（続き）

質問項目	不登校でない児童生徒	R4不登校の児童生徒	違い (オッズ比)	オッズと95%信頼区間
制服、給食、行事等への不適応	1.5%	23.2%	20.40	
入学、転編入学、進級時の不適応	0.5%	3.3%	6.44	
ゲーム・スマホへの依存、依存傾向	0.8%	8.1%	10.95	
あそび、非行	1.5%	7.0%	5.06	
体調不良の訴え	4.5%	18.5%	4.80	
不安・抑うつへの訴え	2.3%	19.0%	9.75	
学校での居眠り等	4.8%	8.3%	1.80	
家庭の生活環境の急激な変化	1.7%	4.4%	2.74	
親子の関わり方	2.3%	13.7%	6.65	
家庭内の不和	1.0%	5.2%	5.38	
学校・家庭以外でのトラブル	0.8%	2.1%	2.67	

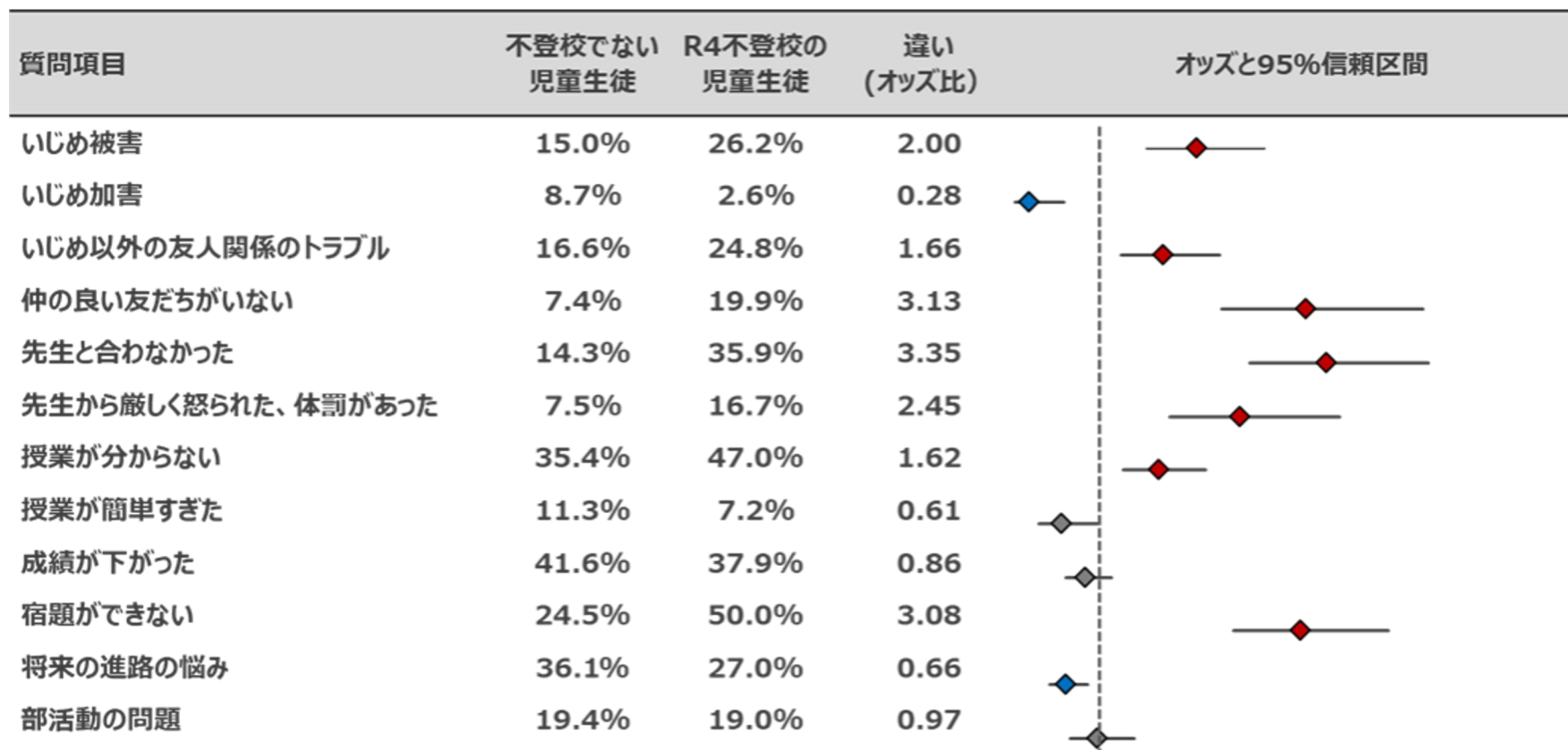


# 教師回答による不登校児童生徒と不登校でない児童生徒の違い（背景要因）

質問項目	不登校でない児童生徒	R4不登校の児童生徒	違い (オッズ比)	オッズと95%信頼区間
特別な教育的支援のニーズ	5.8%	20.8%	4.27	◆
発達障がいの診断・疑い	5.3%	20.6%	4.64	◆
身体的疾患・障がい、睡眠障害の診断・疑い	1.8%	10.0%	5.98	◆
心理・精神的な問題の診断・疑い	1.5%	12.3%	9.12	◆
感覚過敏・鈍麻	1.8%	14.1%	9.00	◆
外国籍、重国籍、日本語以外	1.4%	1.1%	0.74	◆
要対協、要保護、準要保護	0.5%	2.0%	4.31	◆
性自認、性的指向、性表現の違和感	4.7%	11.7%	2.67	◆
家族の介護・介助	0.7%	1.9%	2.67	◆
ひとり親・共働き家庭	3.8%	18.2%	5.57	◆
きょうだいの不登校	1.8%	27.7%	20.37	◆



# 児童生徒回答による不登校児童生徒と不登校でない児童生徒の違い（きっかけ要因）



# 児童生徒回答による不登校児童生徒と不登校でない児童生徒の違い（きっかけ要因）（続き）

質問項目	不登校でない児童生徒	R4不登校の児童生徒	違い (オッズ比)	オッズと95%信頼区間
学校の決まりのこと (制服・給食・行事等)	13.8%	38.6%	3.94	
入学、進級、転校など	7.0%	24.9%	4.40	
声や音がうるさい、いやなおい	23.7%	40.3%	2.17	
インターネット、ゲームの影響	22.9%	42.3%	2.47	
学校とは違ったこと (遊び) をしたい	22.0%	30.3%	1.54	
からだの不調	34.0%	68.9%	4.29	
気持ちの落ち込み、いらいら	49.2%	76.5%	3.35	
朝起きられない、夜眠れない	36.4%	70.3%	4.13	
家での生活がかわった	3.8%	9.3%	2.57	
親のこと (親と仲が悪いなど)	15.9%	27.3%	1.99	
家族の世話や家事	7.7%	7.2%	0.94	





# 目次

- 01. 不登校の現状と課題
- 02. 静的要因×動的（きっかけ要因）
- 03. 不登校に関連する要因
- 04. 考察と提案



# 不登校支援（関連要因から）

## 【いじめ被害及び友達とのトラブルの予防】

児童生徒回答では、不登校の児童生徒の26.2%がいじめ被害を訴えている（不登校でない児童生徒は15.0%）。また、不登校の児童生徒で「いじめ以外の友人関係のトラブル」を訴えている者は24.8%（不登校でない児童生徒は16.6%）であり、友人関係の問題は不登校のリスクを高めると考えられる。いじめや友達関係トラブルが起きにくい集団作り、対人スキルを学ぶ機会の提供が重要であり、集団に馴染めず、孤立している児童生徒に対して早期に支援することが不登校の予防として必要である。

## 【教師の行動、学校風土の改善】

児童生徒回答において、不登校の児童生徒は「先生から厳しく怒られた・体罰」が16.7%（不登校でない児童生徒は7.5%）、「先生と合わなかった」が35.9%（不登校でない児童生徒は14.3%）であり、教師の態度や指導方法が不登校の要因になっている可能性がある。また、児童生徒回答・教師回答ともに、「学校のきまり（制服・給食・行事等への不適合）」が不登校と関連している（オッズ比：児童生徒3.94、教師20.40）。こうした学校のルール設定、活動の設定、教師の態度や指導方法は、学校風土を形作る要素である。学校風土の向上は不登校の予防につながるものであり、COCOLOプランで述べられている学校風土の見える化、校則等の見直しの推進、快適で温かみのある学校としての環境整備などが必要である。



## 【授業改善、学習支援の充実】

「学業の不振」「宿題の提出」は、教師・児童生徒・保護者の三者でほぼ一致して回答割合が高かった。児童生徒回答では、不登校の児童生徒の47.0%が「授業がわからない」、37.9%が「成績が下がった」、50.0%が「宿題ができない」と回答している。加えて、不登校でない児童生徒についても成績が下がったと感じている児童生徒が多く、授業改善や学習支援の充実は不可欠であろう。

## 【児童生徒の体調、メンタルヘルス、生活リズムへの注目】

児童生徒回答では、「からだの不調」「気持ちの落ち込み・いらいら」「夜眠れない・朝起きられない」といった体調、メンタルヘルス、生活リズムの不調が、それぞれ不登校の児童生徒の7割前後に見られた。

一方、それらが2割未満であった教師回答から考えると、教師には児童生徒の不調を正確に捉えることは難しいかもしれない。よって、デジタル端末の活用など、児童生徒の不調に早期に気づく仕組みが必要である。

ただし、デジタル端末等を利用した児童生徒の心や体調の変化に気づく仕組みは、それを活用する教師の知識と支援体制が伴わなければならない。

## 【背景要因へのアプローチ】

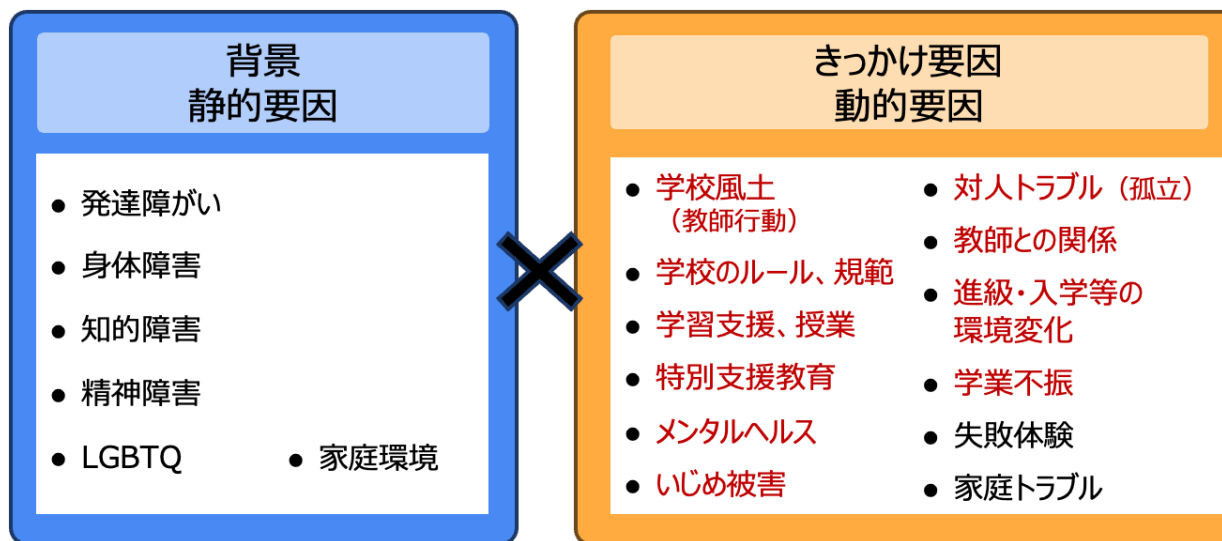
教師回答によると、発達特性、障がい、家庭の困難さなどが不登校と関連することが明らかになった。

これらは、合理的配慮、特別支援教育をはじめとする、長期間の継続的支援が必要なものである。

こうした要因をもつ児童生徒が多く不登校になっている場合、その学校、地域における特別支援教育の在り方、支援システムの構築、保護者への支援について検討が必要であろう。



# 考え方：不登校などの問題の要因



静的要因は変えにくい。むしろ多様性を受け入れるべき今の時代、こうした要因があることが前提で学校教育を考えるべき。

とすると、**「不登校」は、個人・教育ミスマッチ状態**と定義すべきであろう。



今回の問題になったのは、「いじめ」「教師行動」「学習」「制服・給食・行事などのそ  
ろえる文化」であり、これらは「**学校風土**」である。

## 学校風土は魔法の杖

- 学校風土の良さは、いじめ、不登校、暴力、子どものメンタルヘルスの悪化などを予防するだけでなく、学力の向上、教師のメンタルヘルスの安定、離職率の低下に効果がある。

ともすると、私たちは子どもやその背景にある家庭環境に興味が行ってしまいが、それでは十分ではない。

これまで、学校風土のようなものを捉える試みは行われてきた。しかし、その多くは**子どもの学校適応や満足度**など、子どもの問題を測定している可能性がある。私たちが注目すべきは、子どもの問題ではなく、環境（学校風土）や学校の在り方である。

また子どもが捉える学校風土は、教師が感じる学校風土と違うことは、数々の研究から明らかである。

よって、私たちは、**科学的に正確に、子どもの考える学校風土を捉え、課題を把握し、対応しなければならない。**

関連する要因	いじめ被害 (Victim)	いじめ加害 (Bully)	いじめ被害・加害 (Bully/Victim)	登校不安定
性別 (男子)	1.01	1.28	<b>2.95**</b>	1.37
学年	<b>0.81**</b>	<b>0.77***</b>	<b>0.63***</b>	1.02
国籍、言語	<b>2.62*</b>	2.19	<b>3.89*</b>	<b>3.04*</b>
世帯年収	1.00	1.02	0.93	<b>1.30*</b>
ADHDの診断	<b>3.13* (3.28)</b>	3.26	1.81	<b>9.69***</b>
SDQ全体的な困難さ(High need)	<b>2.41****</b>	1.43	<b>3.16*</b>	<b>4.00***</b>
SDQ行為(High need)	1.23	1.62	<b>1.74* (1.55)</b>	<b>3.21***</b>
SDQ多動(High need)	<b>1.57*</b>	1.07	1.15	<b>3.97***</b>
SDQ情緒 (High need)	<b>1.96*</b>	1.17	1.82	<b>2.85***</b>
SDQ仲間 (High need)	<b>2.01****</b>	1.17	1.31	1.36
学校風土 (JaSC合計得点)	<b>0.98****</b>	<b>0.98***</b>	<b>0.97****</b>	<b>0.99***</b>

学校風土の良さは、いじめ、不登校（登校不安定）の保護因子  
子どもみんなプロジェクトについて（児童青年期精神医学会、2019）



# 学校での傷つきが、社会参加に影響を与えている

## 学校ACE<sup>®</sup>研究

日本人成人4000人に聞いたところ、その55.1%が学校における傷つき体験（学校ACE）があった。（いじめが50.5%、教師からの傷つきが20.5%）

一方、家庭における傷つき体験（ACE）は、35.9%

学校ACE、ACEともに成人期のメンタルヘルスに関連があったが、引きこもりと関連があったのは、学校ACEのみ。

	Total n=3999
学校ACE合計：平均（標準偏差）	0.96(1.18)
教師関連スコア：平均（標準偏差）	0.32(0.75)
いじめ関連スコア：平均（標準偏差）	0.64(0.71)
教師精神的虐待（%）	297(7.4)
教師身体的虐待（%）	149(3.7)
教師性的虐待（%）	51(1.3)
教師精神的ネグレクト（%）	577(14.4)
友だちへの暴力目撃（%）	208(5.2)
クラスメイトからのいじめ（%）	1924(48.1)
先輩からのいじめ（%）	632(15.8)
学校ACE 1点以上（%）	2202(55.1)
PHQ-4：平均（標準偏差）	2.65(3.16)
抑うつ不安 中程度以上	653(16.3)
引きこもり（%）	138(3.5)

Front. Public Health, 26 October 2023 | Sec. Public Mental Health  
Volume 11 - 2023 | <https://doi.org/10.3389/fpubh.2023.1277766>

### Adverse childhood experiences: impacts on adult mental health and social withdrawal

[Manabu Wakuta](#), [Tomoko Nishimura](#), [Yuko Osuka](#), [Nobuaki Tsukui](#), [Michio Takahashi](#), [Masaki Adachi](#), [Toshiaki Suwa](#), [Taiichi Katayama](#)



# 子どもの変化に気づくことの大切さ

1. 子どもの状態・変化は教師には見えない可能性がある。
2. 体調不良、生活リズムの問題、メンタルヘルスは重要なフラグ。
3. 入学、進級など、環境の変化、行事などがリスクを高めている可能性がある。

**ツール類（NiCoLi、デイケンなど）により、子どもの体調や生活リズム、メンタルヘルス不調を可視化**

**リスクがあると分かたらすぐに対応するフォローアップシステムを**



# 科学的に正しいことの重要性

- 学校風土も、子どものメンタルヘルスも、見えにくく、曖昧である。
- だからこそ、科学を使って正しく計測する必要がある。
- まだまだ研究途上。学校で使えるエビデンスを創出するためには、学校現場と研究のさらなるコラボレーションが必要。
  - ・ 学校、教育現場の科学への理解
  - ・ 現場の状況がわかり、社会実装を進められる研究者の養成





# 公益社団法人 子どもの発達科学研究所とは・・・

## 私たちは子育て、教育の現場に科学を提供します。

- 子どもの発達科学研究所では、「発達を科学する」ことにこだわり、これまで保守的で、個人の経験や知識・スキルに負うことが中心だった学校教育、発達支援の現場に科学を持ち込みます。すなわち、単なるアンケートではない、科学的根拠に基づいた調査の実施と、その解析結果に基づいた質の高い支援を実現し、子どもたちの健全な発達を守ります。こうした科学的根拠に基づく実践は、広く社会全体で共有される知識となり、あまねく社会全体の発展に貢献します。

### 【実績（抜粋）】

- **大阪府吹田市、すいたGre・ENスクールプロジェクト**：『いじめ予防プログラムトリプルチェンジ』を展開 NHKスペシャルにて放映
- **こども家庭庁、学校外からのアプローチによるいじめ解消の仕組みづくりに向けた手法の開発・実証事業**：専門機関として2023年度は8自治体、2024年度は12自治体の伴走支援等を行っている。
- **文部科学省委託事業、不登校要因調査**：山梨県、宮崎県延岡市、大阪府吹田市、広島県府中市の教育委員会の協力を得て、調査研究を実施。



# 調査ツールの提供

## 【実績（抜粋）】

- **大阪府吹田市**：全ての小中学校でデイケンを実施中。昨年度はモデル校について、デイケン、NiCoLi、学校風土調査の3つのツールを展開。
- **東京都品川区**：全ての小中学校で、デイケン、NiCoLi、学校風土調査、いじめDアンケートの4ツールを展開。いじめ予防プログラムトリプルチェンジ、教員研修も実施。



## 【研究所のツール類の紹介】

**ここらからの連絡帳デイケン**：毎朝の健康観察をデジタル化。子どもの体調、メンタルヘルス等の毎日の変化を取得し、リスクの状態を把握することが可能。援助要請機能により、子どもたちの安心安全を確保。

**ここらの健康観察NiCoLi**：捉えにくいがいじめ被害や不登校の予兆である子どものメンタルヘルスを正確に測定。個別のフィードバック票は、面談や専門機関との連携に使用できる。

**学校風土調査**：学校風土の状況を日本で唯一、科学的に正しく計測できるだけでなく、学校風土向上のために何をすべきかがわかる

**いじめDアンケート**：いじめ防止対策推進法にある「いじめアンケート」を完全デジタル化。学校でのいじめ被害や目撃、対応の状況を一元管理し、一人ひとりのこれまでの経緯も把握可能。



**不登校要因調査は、以下のHPからダウンロードすることが可能です。**

公益社団法人 子どもの発達科学研究所

<https://kohatsu.org/20240325research-report/>

